

Prevalence of and risk factors for low bone mineral density in Japanese female patients with systemic lupus erythematosus

古川, 牧緒

<https://hdl.handle.net/2324/1560386>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏 名：古川 牧緒

論 文 名： Prevalence of and risk factors for low bone mineral density in Japanese female patients with systemic lupus erythematosus

(全身性エリテマトーデスの日本人女性患者における骨密度低下の有病率と危険因子)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

目的：全身性エリテマトーデス（SLE）は診断法と治療法の進歩により長期生存可能な疾患となったが、最近では骨粗鬆症などの長期的な合併症が問題となっている。SLE 患者における骨粗鬆症の主な原因はコルチコステロイド投与と考えられるが、ステロイドとの関連がなかったという報告も存在し、疾患そのものの関与が考えられている。日本人 SLE 患者における骨粗鬆症の有病率を調査した論文は 1 報しかない。この研究の目的は日本人女性 SLE 患者における骨密度低下(BMD)の有病率と危険因子を調査することである。

方法：58 人の SLE 女性患者に対して腰椎(L2-L4)と大腿近位部において二重X線吸収分析法によって BMD 測定を行い、さらに患者背景ならびに臨床要因および治療関連データの収集を行った。SLE 患者における BMD 低下と各因子の関連性について単変量解析を行い、 $P<0.1$ であった要因について BMD 低下との関連性について多重ロジスティック回帰分析を行いオッズ比 (ORs) と 95%信頼区間 (CI) を算出した。オッズ比は年齢と罹患期間を調整し、両側 $P<0.05$ を有意とした。

結果：SLE 女性患者の BMD の平均 \pm SD は、腰椎と大腿近位部においてはそれぞれ $0.90 \pm 0.17\text{g/cm}^2$ と $0.76 \pm 0.17\text{g/cm}^2$ であった。オステオペニア ($-2.5\text{ SD} < \text{T スコア} < -1\text{ SD}$) の有病率は 50%であり、骨粗鬆症 ($\text{T スコア} < -2.5\text{ SD}$) の有病率は 13.8%であった。腰椎の BMD 低下 ($\text{T スコア} < -1\text{ SD}$) のリスクを上げる要因としては分娩回数が 1 回以上であること (年齢と罹患期間を調整した調整 OR = 5.58、95% CI = 1.31-26.06; $P = 0.02$)、またリスクを下げる要因としては経口コルチコステロイドの最大投薬量が 50mg/日より多いこと (調整 OR = 0.25、95% CI = 0.07-0.91; $P = 0.035$) を同定した。

結論：日本人の SLE 女性患者においては BMD 低下、特に腰椎海綿骨における低下が観察された。分娩歴を持つ患者では腰椎 BMD が低下していた。一方、高用量経口コルチコステ

ロイド投与の既往歴が腰椎における BMD の保持と関連していた。しかし限られたサンプルサイズを考慮して更なる検討が必要である。